



表現の不自由、不平等とは：
女が性的脅威を表現することの困難について(一九九
六年度第二回コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004997

表現の不自由、不平等とは—女が性的脅威を表現することの困難について

萩原弘子

メディアに登場する女性像は、社会のなかで女がどういう位置にあるかという現実を反映しているが、それはことの半面で、同時にメディア自身が女のいまある現実を日々積極的に作りだしている当事者であることはすでに指摘されて久しい。そうなっている理由が、表現／発信をめぐる特権の集中にあることも指摘されてきた。つまり一方には表現／発信する側に立ちやすい者、メディアのなかに自分の考えが代弁されていると感じることが多い者、メディアの内容が自分に向けられたものだと感じる人が多い者がおり、他方にはそうでない者がいる。特権の集中を決めている要素は性別だけではないが、特権へのアクセスの幅を左右するさまざまな要素のなかでも、やはり性別は大きな意味をもつと言ってよいだろう。男に比べて女は、メディアをつくる側、発信者にはなりにくく、メディアのなかに自分の意見が代弁されていると感じることがより少なく、ほかのだけれどもなく自分に向けられた内容だと思えるものがより少ないのである。そこで女がメディアのつくり手の側に参入していくことが重要課題となる。それなくしては日本のメディアの女性差別状況、ひいては日本の女性差別状況は変わらない。

それは疑いえないのだが、ここで私が考えたいのは、では、より多くの女がつくり手の側、発信する側に立ち、表現／発信をめぐる特権の集中を打破するとは実際にはどういう課題なのかである。多数の参入すなわち特権の打破、ではない。表現／発信する側への女の参入が必須なのは、これまでメディアのなかで力をもっていた表現を変えるためであり、それが特権の打破である。むろん参入しないことには、特権の打破も変革もありえない。しかしそれは決して、女が増えればおのずと変わるといったことではなく、その課題の困難さはただならぬものだ。

ここではとりあえず話を視覚的表現に限ろう。メディアが流通させてい

る視覚的図像は、言語と同様、いやどうかすると言語以上に、われわれのものの方、見え方を強く規定している。女を性的存在へと一面化し、性的所有、支配の対象と位置づけるような女性像の視覚的表現は日本のマスメディアの得意とするところだが、程度の問題はあるにしても、なにもそれは日本だけのことでも、また「マス」と呼ばれる規模の現代のメディアだけのことでもない。たとえば女に対する性的脅威を脅威として表現することは非常に困難だが、その困難さはいわゆる芸術と呼ばれる表現の分野でも同様である。

1986年にアメリカで『強姦』と題して行なわれた展覧会は、女性アーティストが強姦をテーマとして制作した作品を集めたもので、卑劣な性的暴力をつくりだすアメリカ社会のありよう（マスメディアのありようも含めて）を考えるフェミニスト的催しとして高く評価された。展覧会が巡回した各地ではその地域の強姦救援センターなどがシンポジウムを行ない、強姦が女の何をどう傷つけるかを女が表現しないことには強姦のない社会をつくることはできないという確認がされた。フェミニストとして美術評論の活動に長くたずさわってきたルーシー・リップードも、この展覧会の意義を評価してはいるのだが、同展に関する彼女の評論に価値があるのは、むしろ、女が受ける性的脅威を脅威として表現することの困難に言及している点である。男性雑誌に登場する女性像のことごとくに強姦がほのめかされていることを批判するリネット・モルナーの作品を評するなかで、リップードは次のように言っている。

「ポルノグラフィが女の生活にどんな脅威を与えているかを語る女たちのコメントを付けたカラー写真のシリーズは、胸打つもので、静かだが雄弁である。ところがこの作品ですら、エロティックだと言う人がいた。性的暴力をめぐるこの種の混乱はいたるところにはびこっている。2年ほど前、バーバラ・ジョ・レヴェルは、男たちが街頭インタビューに答えて語る女性観を引用したポスターを制作したが、シカゴ交通局から、女性を侮辱しているとして検閲対象となった。」¹

性的暴力を描くことでエロティシズムを謳歌しようというのが、性の表現のいわば規範的な文法として確立している社会にあっては、性的暴力を

脅威として、つまり女が脅威と感じる脅威的脅威として表現し、伝えるのは容易ではない。モルナーやレヴェルの作品のように、性的脅威を脅威として示すために引用しても、性的脅威を「素敵にエロティック」として表現したものと区別することがむずかしいからだ。既存の表現文法が男の視点に立つものである以上、それを壊す方向で女が表現していくことが必要だが、既存の表現を支えている規範の求心力は強い。性的脅威の現実を批判するつもりで引用しても、見る者にはその引用の行為は見え、既存の文法に従って読まれてしまいかねない。シカゴ交通局がレヴェル作品を検閲したのは、女に侮辱的な表現の批判的引用であることがそもそも見えなかったか、あるいは、人々に見えないのではと危惧したか、であろう。リップード自身がかつて指摘したように、たしかにそれは見えにくいのである。

「女が自分の顔やからだを使って表現するとき、それらで何を表現するかを決定する権利は女の手にある。しかし、男が性的興奮のために女を使うのと、それがいかに侮辱的であるかを示すために女が女を使うしかたを見分けるのは、きわめてむずかしい。」²

性的脅威のなかでも強姦は、実は西洋美術史のなかの伝統的テーマであった。神話、歴史に想を得て強姦を描いた絵画は多い。強姦をタイトルに冠した作品としてすぐに思い浮かぶものに、『サビネの女たちの強姦』『ルクレティアの強姦』『レウキッポスの娘たちの強姦』などがあるが、いずれもルネッサンスから19世紀にいたるまで繰り返し描かれている。それらは卑劣な性的暴力としての強姦の図ではない。よく知られるルーベンスの『レウキッポスの娘たちの強姦』(c.1617年)について、たとえば次のような解説(読み)が行なわれるのである。

「豊かに躍動する生命のからみ合い。ギリシア神話の悲劇に取材しながらも、事件の意味する暗さはなく、いわば官能と健康に満ちた生命の脈動そのものである。」³

ルーベンスが描いた白く光る女のからだは、強姦の卑劣さや衝撃を表現するものではなく、まさに「豊かに躍動する生命の官能」を表現することで強姦の神話化を果たしている。強姦を描いたものが官能を意味する以上、

強姦を描くことでそれが卑劣な暴力だという意味を伝えるのはむずかしい仕事である。

表現の自由の問題といえば、すなわち性表現の自由の問題として議論が進むことが多いが、表現というのはなにも性表現ばかりではないことは重要である。しかしここで議論を性表現に限ったとして、では、性表現の問題として論じられるのが、官能や性的快樂の表現についてばかりであるのは、どういうことか。女にとっては、性的快樂よりも性的脅威のほうがはるかにせっぱつまった性的現実だが、脅威を脅威として表現することは容易でなく、それは表現に値する重要テーマとも考えられていない。性の何をどう表現するかを決定する力は男に集中しており、表現についての堅固な規範と、表現される意味の体系が存在する。それに対抗的で規範からはずれた表現でも、既存の意味体系のなかに回収してしまうような力学が働いている。そういう力学が働くなかで、脅威を脅威として表現するには、つまり脅威の表現が「素敵にエロティック」という意味ではなくて、ずばり「脅威」を意味するようになるにはどうしたらよいのだろうか。表現の自由は占有されており、それは表現する機会の占有ばかりでなく、表現されるべき意味、表現されたものの意味を決定する力の占有も含む。占有の外には必然的に表現の不自由、表現する自由の不平等が作りだされる。目標は占有への参加ではなく、占有の解体である。女が表現する側に立ったところで、既存の表現文法への参加に留まるのでは無意味である（残念ながらそれはしばしば起こっていることだが）。参加も容易でない社会で参加をかちとり、さらには既存の表現文法に回収されない新しい文法をつくって、既存の意味体系を浸食していくという困難な仕事が必要である。

表現するとは、われわれが生きるこの世界がわれわれにとってもつ意味をre-present（再-提示）することであり、それは世界を或る秩序に従って構築、再構築することである。それはよくも悪くも必ず力の行使をともなう。表現／発信をめぐる特権の集中を打破するとは、この世界の意味を秩序だてる行為をする力を平等に分有するということであり、暴力の暴力性が、性的脅威の脅威性が伝わる表現を可能とする新しい秩序をつくるということである。⁴

[注]

- 1) Lucy Lippard, *The Pink Glass Swan*, New York: The New Press, 1995, p. 246.
- 2) L. Lippard, *From the Center*, New York: Dutton, 1976, p. 126.
- 3) 『ルーベンス』(解説 嘉門安雄) ファブリ世界名画集13、平凡社、1969。
- 4) ではそれに向けて視覚表現の分野でどういう挑戦や試みが必要で、また有効かという問題については、次の拙稿参照。「性、からだ、表現——新しい意味へのフェミニスト的展望」『シリーズ 性を問う』第4巻、専修大学出版局、1997。